

## 平成 29 年度 学術振興基金助成による成果報告書

平成 29 年 12 月 25 日

学 長 殿

所属部局・職名 人間発達文化学類・教授

申 請 者 名 渡邊晃一

助成事業の区分 (該当するものに印)	研究協力に関する事業 ( 学術出版・叢書・学会等運営・ 学会参加 ) 学術振興に関する事業 ( 学生・事務職員・その他の特別事業 )
事 業 名	美術解剖学会 《モナ・リザ》の姿勢に関する一考察 A Study on the attitude of "Mona Lisa"
事業実施期間	平成 29 年 7 月 15 日～平成29 年 7 月 16 日
成 果 の 概 要	<p>「肖像画」というジャンルの中で，《モナ・リザ》の持つ特異性の一つは，まずその顔の向きにあると言われてきた。「肖像画」はこれまで一般的に人物の目鼻立ち，体つきなどの身体的特徴を示すことで，モデルとなった対象が特定出来るように「横向きの顔（プロフィール）」が選択されてきた。横顔は骨格に依存しており，老化や体重の増減，病気等によってほとんど変化しない。横顔は，鼻や顎の形が正面よりもモデルとなった人物の特徴を引き出すことが容易であり，モデルを一度見ただけで画家が再現しやすいという理由もあげられる。</p> <p>一方，《モナ・リザ》の姿勢は，左側に斜め45度向けられている。左側に傾けられた理由としては，左側の顔に柔和な印象を感じる説や，心臓が左側にあることから，その位置を前に向けることで，相手に寛容な印象を与える理由などをこれまで当てられてきた。</p> <p>本研究では，このような《モナ・リザ》のポーズに関わる見解に対して，新たに二つの視点を提示した。</p> <p>モデルのポーズを生み出す上で，レオナルドは，北方フランドル絵画から手掛りを得たとする説もあるが，顔と体幹のひねり，腕の角度，胸下に組まれた手は，これまでの「肖像画」の姿勢とは大きく異なっている。</p> <p>《モナ・リザ》の螺旋的な動きは，レオナルド自身の一連の変遷の中で強調されてきたものである。本研究では《モナ・リザ》の画期的な創意工夫として，トロンプ・ルイユの観点からあげた。《モナ・リザ》の姿勢に描かれた詭計として，レンブラントを重要な継承者として提起した。</p> <p>一方，実際にモデルがこのようなポーズで静止するのは困難であり，《モナ・リザ》のポーズには，写真像とは異なる「最も含蓄のある瞬間」のムーヴマンが描かれている点をあげたい。鑑賞者はなぜ《モナ・リザ》に，自然で優美な流麗な印象を受け取ることができるのか。そこには，写真とは異なる，レオナルドの美術解剖学に基づく姿勢が含まれていることを示した。</p>